

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370507

研究課題名(和文) 戦前期地方教育関係資料を活用した近代国語観の見直しと文献方言学の試行

研究課題名(英文) A revision of the language ideologies in Japanese modern era and a trial of the philological dialectology on the basis of the local educational materials in prewar era

研究代表者

大野 眞男(OONO, Makio)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：30160584

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代国語観の変遷に関して、各地に散在する全国各県の地方教育会資料から方言関係記事を抽出した戦前期地方教育会雑誌方言関係記事データベース(PDF形式1527ファイル)を作成した。戦前期地方教育会資料が収載された膨大な方言情報の活用に関して、岩手県郷土教育資料(昭和11年・15年)に反映した岩手の小学校教師たちの草の根的な国語観を分析した上で、岩手県郷土教育資料に収載された14681点の方言情報についてデータベース化を行い、これを活用して昭和初期の岩手県方言地図の電子的復元を試行した。これらの研究成果の報告会を岩手県立図書館と共催で開催した。

研究成果の概要(英文)：First, to grasp the shift of national language ideologies through the modern age of Japan, we have constructed the database (1,527 pdf files) of the dialect concerned articles extracted from the local magazines published by the prefectural institutes of education in the prewar era, which nowadays are scattered all over Japan. Second, as a trial to make use of the enormous amount of dialect information contained in the mass of documents made by the prefectural institutes of education in prewar era, we have constructed the database (14,681 words) of dialects contained in "the local education reports of Iwate prefecture" which were submitted on 1936 and 1940 from all the elementary schools in Iwate, and analyzed the national language ideology borne by the school teachers at that time which were expressed in the preface of each reports. In addition to these results, we have held a briefing session of this project on February 2016 under the joint auspices of Iwate prefectural library.

研究分野：日本語学

キーワード：国語政策 方言 地方教育会 戦前期 国語観

1. 研究開始当初の背景

本研究は、(1) 一般的には国語国字問題として認識されてきた国語の具体的内実の議論とは異なり、言語政策・言語計画という観点から近代以降の国語観（国家の公用語の在りかた）の変遷を、草の根的な地方教育関係資料を通して補完し、併せて、(2) 従来活用されることになかった戦前期の地方教育関係資料等に所収された膨大な方言資料について、文献方言学的手法によりコーパス化を図ることを目的として研究を開始した。上記(1)に関連する国内外の研究背景としては、安田敏朗『帝国日本の言語編成』(1997)・『<国語>と<方言>の間』(1999)等の一連の包括的な論考があるが、氏の論点は官主導による国家語形成と普及に関する批判的再評価にあると判断されるものの、地方教育資料には触れられていなかった。日本近代の言語政策を論じた T. Carroll, *Language Planning and Language Change in Japan* (2001)、及び N. Gottlieb, *Language and Society in Japan* (2005)、N. Gottlieb, *Language Policy in Japan* (2012)、P. Heinlich, *The Making of Monolingual Japan* (2012)等においても、地方教育関係資料には同様に言及されていなかった。上記(2)に関する研究背景としては、竹田晃子「明治・大正・昭和初期の方言調査資料の発掘 新たな「文献方言学」の前提として」(2012, 科学研究費成果報告書)が地方教育関係資料に着目する新たな研究手法を提案しているほかには、国内外に関連する研究は見られなかった。

2. 研究の目的

日本語の国語としての在り方（国語観 language ideology）は、百数十年前の明治維新以来、一種の国語純化運動的な側面を持ちつつ様々な形で政策化が推進され現代に至っている。具体的には、明治期の国語調査委員会において上田萬年、大槻文彦、保科孝一等により策定・推進された「標準語」の普及と、戦後において国立国語研究所及び国語審議会を中心に進められた「共通語」の広がりによって、現代の国語の在り方は確立されたものであった。しかしながら、近代日本社会全体における議論を俯瞰した時に、戦前の「標準語」から戦後の「共通語」へというように国語のモデルが単線的・離接的に移行されたわけではなく、近代国語史の各段階において国語の在り方をめぐる議論が、様々な社会事情を背景として多様に展開されてきた。本研究では、国語の在り方をめぐる歴史を多様な「国語観」の集積としてとらえ直し、国家機関には属さない民間人による国語観が形成される有力な場として学校教育を想定した。学校教員及びその関係者たちによる方言を排斥しない草の根的な国語観の形成過程を、明治期以降発行され続けてきた地方教育関係資料を用いて歴史的に位置づけ直すことを第一の目的とした。この時代の学校

教育関係者は、国家語教育の直接的実行者であると同時に、一方で柳田国男等の民俗思想の影響を受容した郷土文化教育の担い手でもあるという一種自己矛盾した立場を内包しており、彼らの国語観の形成動向は戦後の「共通語」政策との連続性を歴史的に担保するものとして重要である。これらの動向は学史的に言えば柳田国男や東条操等によるアカデミックな方言研究草創の時代と一致するものであり、『国語教育』等の教育関係雑誌記事を通じた柳田・東条らの教育界への影響についても併せて検証を行った。

また、その過程で日本全国にわたって産出された多様な膨大な方言記述資料について、多種多様なデータの堆積を統合的に処理する新たな文献方言学的手法により、昭和初期の方言分布の状況を把握することを第二の目的とした。戦前の土俗学的手法による膨大な方言記述資料は、戦後の構造主義言語学の導入以降は積極的に活用されることが一切なかったが、明治期の国語調査委員会と戦後の国語研究所の研究成果を緩やかにつなぐ位置づけの資料として利活用を可能とするデータベース化の方法論の模索と試行を行った。具体的には、岩手県域をパイロットケースとして、昭和11年・15年に全県下の小学校で一斉に行われた「郷土教育資料」を中心とする方言記述を対象に昭和初期の方言分布を再構築し、LAJ（日本語地図）等の戦後期の資料との突合せにより歴史的検証を図った。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成する研究計画・方法は、基本的には文献資料の掘り起こし、データベース化及び再評価という手法による。国語観をめぐる第一の目的に関しては、(1) 明治期の国語調査委員会周辺による国語政策の推進過程と調査資料の再検証、(2) 大正期・昭和初期における国語観の多様化の地方教育関係資料による検証を通じて、国家語から草の根レベルの国語観への変遷を明らかにした。文献方言学的手法をめぐる第二の目的に関しては、(3) 昭和初期における地方教育関係資料に収載された方言資料のデータベース化の試行（岩手県域）、(4) 明治期及び戦後期の方言関係資料と(3)の昭和初期資料との突き合わせを通じて、昭和初期の膨大な地方教育関係資料の方言関連情報が持つ歴史的有用性の一端を明らかにした。

(1) 明治期の国語調査委員会周辺による国語政策の推進過程と調査資料の再検証、及び、(2) 大正期・昭和初期における国語観の多様化の地方教育関係資料による検証については、都道府県ごとに刊行されていた教育会雑誌を直接の分析対象とした。これらの膨大な教育会誌の一部は、『教育関係雑誌目次集成第 期・国家と教育編』及び『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧教育編』によって記事タイトルを確認す

ることができるが、全く目録化されていない
県域も多く存在していたので、必要に応じて
該当県立図書館等に臨地調査することで情
報保管を行った。その結果、秋田・岩手・宮
城・山形・福島・新潟・群馬・埼玉・栃木・
茨城・千葉・神奈川・愛知・富山・京都・兵
庫・山口・愛媛・長崎・熊本・鹿児島・沖縄
等、どちらかといえば標準語励行運動が積極
的に推進された県域の記事情報を中心に、明
治から昭和にかけての時期の国語観の変遷
に関する資料を収集し、「戦前期地方教育会
雑誌方言関係記事データベース（pdf 形式
1,527 ファイル・計 21.3GB）を作成した。

(3) 大正期・昭和初期における地方教育関
係資料に収載された方言資料のデータベー
ス化の試行については、パイロットステー
ドとして岩手県域をとりあげ、民間の方言研
究が活発に行われた昭和初期の地方資料を
中心にデータベース化を図った。具体的には、
昭和初期に文部省の指導の下に全国的に行
われた郷土教育運動の一環として、岩手県及
び岩手県教育会によって県下の全小学校で
取り組まれた郷土調査報告を取りまとめた
「岩手県郷土教育資料」（昭和 11 年・15 年）
を対象に、岩手県域全体をカバーした当時の
方言資料のデータベース化を図った。その結
果として、「岩手県郷土教育資料収載方言デ
ータベース」として、14,681 点に及ぶ pdf 形
式の昭和初期岩手方言情報についてのデー
タベース化を行い、併せて上記データベース
より抽出した方言情報に関するエクセル形
式データベース（70,642 行）を作成した。

(4) 明治期及び戦後期の方言関係資料と
(3)のデータベースを昭和初期資料との方言
文献学的手法による突き合わせについては、
「岩手県郷土教育資料収載方言データベー
ス」（エクセル形式）を活用して、資料横断
的検索システムを開発して電子的に言語
地図化を試行することにより、明治期の国語
調査委員会による報告、戦後の国立国語研
究所による LAJ や GAJ との経年的比較を試みた。

4. 研究成果

研究成果は、最終年次に報告会「明治期か
ら昭和初期の地方教育資料が語る岩手県の
「国語」と「方言」 「国語」の発見と「方
言」の再発見」(平成 28 年 2 月 20 日・岩
手県立図書館ミニシアター/文化庁被災地
における方言活性化支援事業・岩手県立図書
館共催)を開催した。主として「岩手県郷土
教育資料」と岩手県教育会雑誌である「岩手
学事彙報」に関する新発見とその概要につ
いて、研究代表者・分担者・協力者の研究成
果を岩手県の一般市民を対象に報告した(参
加者 70 名程度)。

その際、報告資料冊子(36 頁)及び『岩手
県の「国語」と「方言」に関わる年表・試作
版』(39 頁)を配布した。報告概要は以下の
とおりである。

(1) 明治から昭和初期までの国語観の変遷

津波から立ち上がる郷土の言葉

大野眞男(岩手大学)

国語の近代化に関する時代区分、
「標準語」以前の国語観、国語としての
「標準語」構築・実施と「方言」の排
斥、昭和初期における方言の「再発見」、
郷土教育運動の高まりの中で 津波
から立ち上がる郷土の言葉、郷土教
育運動で再発見された方言の価値

【概要】明治期確立された国家語的国語
観が、大正期・昭和期を通じて方言を排
斥しない国語観に推移していく過程が、
地方教育会資料及び岩手県郷土教育資
料の分析を通じて検証された。

(2) 郷土教育資料に見る岩手の方言分布 沿岸被災地の言葉の特色

竹田晃子(フェリス学院女子大学)

岩手県の方言区画、資料の性質、
「郷土教育資料」による方言区画(方言
資料としての全体像・方言分布の状況)
呈示地図 23 葉(130 地点一覧図、「舌」
「額」「おもしろい」「かわいそうだ」
「怠け者」「徳利」「頬」「仲間に入れ
る」「雷」「暖かい」「蜻蛉」「難儀す
る」「蝶」「蚕」「赤飯」「困炉裏」「思
い出す」「顎」「化け物」「車前草」「驚
く」「蜂」「これこれ/やあやあ(呼び
掛け)」各語形分布図)

【概要】「岩手県郷土教育資料収載方言
データベース」から試行的に再構築され
た昭和初期の岩手県内方言分布図 7 葉の
呈示により、戦後の LAJ 段階では既に曖
昧化していた岩手県沿岸部方言の特色
的分布が昭和初期には明瞭に存在して
いたことを検証することができた。

(3) 昭和初期の郷土教育資料に見る「方 言」

小島聡子(岩手大学)

昭和初期の郷土教育資料、15 年資料
の様々な「方言」記述、方言以外の項
目から

【概要】岩手県郷土教育資料における方
言の記述様式の多様性と、歌謡や昔話な
どの方言に関連する項目の記載様式に
ついて類別した。

(4) 明治 30 年代の『岩手学事彙報』にみ る地域のことばと「国語」

小島千裕(北海道大学大学院生)

はじめに、『岩手学事彙報』とは、
地域のことばの調査の開始、(教育
会による組織的調査、個人研究の広が
り) 小学校教育における地域のことば
(岩手県師範学校・附属小学校における
矯正の方針の提示、小学校での取り組
みの状況) まとめ

【概要】小学校における国語科の成立に
伴い明治 30 年代に開始された標準語・
方言をめぐる教育の状況について、地
方教育会誌『岩手学事彙報』を資料として
国語教育史の観点から分析・報告した。

(5) 全国の地方教育資料 山梨県を中心に

吉田雅子(実践女子大学)
発表の目的、山梨県の特徴「方言」と「教育」を中心に、山梨方言データベースに見る教育資料、方言に関する山梨県教育資料の分類と実例、まとめと今後の課題

【概要】全国各地に残されている地方教育資料の昭和初期方言資料としての新たな活用可能性について、山梨県資料を具体的に取り上げて、その現状と展望を分析・報告した。

(6) 方言データベースを地図化する

鎌水兼貴(国立国語研究所)
方言データベース、言葉の地域差を考える、方言集や談話資料からの言語地図(方言集の利用、定型化されていないデータの収集)、言語地図作製(方言集からの言語地図作製、検索機能の充実化)、方言集資料の重要性(学術的重要性、地域資源の重要性)

【概要】「岩手県郷土教育資料収載方言データベース」を活用して電子的に昭和初期の岩手県内方言分布図を復元試行する際に必要な資料横断的検索と地図化に関するシステム開発について報告し、ウェブを通じて遠隔ワークステーション上の同システムにアクセスして検索と地図化のデモンストレーションを行った。

今後の課題として、「戦前期地方教育会雑誌方言関係記事データベース」(pdf ファイル形式)、「岩手県郷土教育資料収載方言データベース」(pdf ファイル形式)及び同データベース(エクセル形式)の本格的運用と公開に向けた研究を継続して取り組む必要がある。併せて、地域に向けた上記報告会での報告内容の日本語学会等での学術的発表、学術図書としての刊行等を継続して計画していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

竹田晃子、国語調査委員会による音韻口語法取調の現代的価値、日本語の研究、査読有、11巻2号、2015、pp.101-116

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

報告会「明治期から昭和初期の地方教育資料が語る岩手県の「国語」と「方言」「国語」の発見と「方言」の再発見」(平成28年2月20日・岩手県立図書館)と、同図書館での関連展示(平成28年1月30日~2月28日)の開催

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野眞男(OONO, Makio)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号: 30160584

(2) 研究分担者

鎌水兼貴(YARIMIZU, Kanetaka)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立国語研究所・理論・構造研究系・研究員

研究員

研究者番号: 20415615

(3) 研究分担者

(平成26年度まで、以降、研究協力者)

竹田晃子(TAKEDA, Kouko)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立国語研究所・理論・構造研究系・研究員

研究員

研究者番号: 60423993

(4) 研究協力者

小島聡子(KOJIMA, Satoko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 70306249

(6) 研究協力者

吉田雅子(YOSHIDA, Noriko)

実践女子大学等非常勤講師

(5) 研究協力者

小島千裕(KOJIMA, Chihiro)

北海道大学大学院教育学院教育学専攻

博士後期課程